

バタイユとヘーゲルの終わりなき共犯関係 ——バタイユによるヘーゲル受容の変遷について

竹内大祐（東京都立大学）

本稿で試みるのは、ジョルジュ・バタイユがいかにしてヘーゲルを受容し、またヘーゲルと対決したのかということについて、時とともに変化するバタイユのヘーゲルに対する態度に目を配りながら整理することである。ゆえにその記述は年代記的なものとなるだろう。ヘーゲルに対する若き日の表面的な理解と不誠実な扱いから始まり、深い賛嘆の感情を経て、その感情ゆえに浮き彫りになる自身とヘーゲルとのあいだの齟齬に苦悩し、ヘーゲルの思考をその体系が自己崩壊するところまで推し進めたバタイユの思考の歩みをたどる。なお、年代記的な記述とはいえ、バタイユがヘーゲルに言及するすべてのテキストを扱うことは紙幅の関係上できない。特に50年代以降のテキストはそれまでとは異なる仕方ではヘーゲルに言及しているように思われるため、本稿では50年代以降のテキストの読解に深く入り込むことはせずに、その要点を示し、今後の展望を述べるにとどめる。その意味で本稿は、先史時代、宗教、芸術にばかりかかずらうようになった50年代のバタイユが、それでもなおヘーゲルに関わっているとすればそれはいかなる仕方によってであるかという問いに答えるための予備的研究となるだろう。

1. バタイユのヘーゲル受容と批判¹

バタイユがいつからヘーゲルを読み始めたかということは、全集第12巻に収められた国立図書館の貸出記録をとおして確認することができる。それによれば、バタイユは1925年にヘーゲルの『論理学』と『精神哲学』の仏語訳を借り出している²。にもかかわらず、バタイユ自身が「ヘーゲルの著作との接触の本当の始まり」³であると語っているのは、アレクサンドル・コジューヴがパリの高等研究院において『精神現象学』の講義を始めた1933年である。もちろん、この言葉を鵜呑みにしてことさらにコジューヴの講義以前以後という分断を強調することには慎重にならなければならない。実際、それに先立つ1929年から1931年にかけて、バタイユ自身が主宰する雑誌『ドキュマン』に寄せられた論考（たとえば「人間の形象」や「低次唯物論とグノーシス」）においてすでにヘーゲルに言及している

¹ バタイユのヘーゲル受容についての先行研究には以下のようなものがある。Bruce Baugh, *French Hegel : From Surrealism to Postmodernism*, Routledge, 2003, pp. 71-91 ; 西山雄二「ピラミッド、オベリスク、十字架 バタイユとヘーゲルの密やかな友愛をめぐって」、『現代思想』第35巻第9号、青土社、2007年、300-314頁。また、フランスにおけるヘーゲル受容についての先行研究には以下のようなものがある。Gwendoline Jarczyk & Pierre-Jean Labarrière, *De Kojève à Hegel : 150 ans de pensée hégélienne en France*, Albin Michel, 1996 ; 西山雄二「欲望と不安の系譜学——現代フランスにおける『精神現象学』の受容と展開」、『ヘーゲル 現代思想の起点』滝口清栄・合澤清編、社会評論社、2008年、82-105頁。

² Georges Bataille, *Œuvres complètes*, XII, Gallimard, 1988, p. 562. 以下、O.C.と略記。

³ Bataille, O. C., VII, Gallimard, 1976, p. 615.

ほか、1932年にはまとまった分量のヘーゲル論（「ヘーゲル弁証法の基底への批判」）を発表している。「接触」ということに関しても、それはコジューヴによって媒介された「接触」にすぎないのであり、コジューヴの解釈によって変更されたヘーゲルとの「接触」であるということは十分留意する必要があるだろう。

だが、バタイユをして「私をへし折り、打ちのめし、私を十回死に追いやった」⁴と言わしめたコジューヴの講義を経て、バタイユのヘーゲルに対する態度が一変したことは認めなければならない。ヘーゲルとの「接触」以前のバタイユは、ヘーゲルの言っていることを本当の意味で「真面目に」受け取っているわけではなかった。実際、「ヘーゲル弁証法の基底への批判」でバタイユがおこなったことは、同論考で言及されるドイツの哲学者ニコライ・ハルトマンにならって、「経験によって裏付けられ、現実のうちに根拠を持つテーマと、言葉のうえでしか価値を持たないテーマとを区別すること」⁵であり、「そこを越えれば弁証法の適用が実りあるものとなるような境界線を認識すること」⁶である。それはすなわち、ヘーゲルの壮大な体系である『エンチクロペディー』から、『論理学』と『自然哲学』をそれらが机上の空論であるという理由で削り取り、『精神哲学』のそのまた一部分だけをことさらに意味のあるものとして取り上げるべきだという、ヘーゲルに対して不誠実な態度をとることの意思表示である。ここでバタイユがヘーゲル弁証法に価値を見いだすのは、ただ階級闘争との関連においてのみであり⁷、彼はヘーゲルが知の体系を完了させたことなどまったく問題にしていない。

ところが、コジューヴの講義を経てヘーゲルに「接触」したあとのバタイユは、ヘーゲルのこの体系にある種の「真面目さ」をもって真摯に付き合うことになる。「いかなる学説も彼〔ヘーゲル〕の学説には匹敵しない、それは実証的知性の頂点なのである」⁸という『内的体験』における一節は、「ヘーゲル弁証法の基底への批判」の頃のバタイユからは決して出てこないであろう深い賛辞であり、続く一節においてはキルケゴールとニーチェを、そのヘーゲルに対する無知ゆえに批判している。

しかしこの賛辞の一方で、ヘーゲルを「真面目に」受け取った者だけがそれを抱き得るような深刻な問いを抱き、苦悩したバタイユは、1937年に社会学研究会⁹で行われたコジューヴの講演の数日後に書かれたコジューヴ宛書簡において、この問いを素朴な言葉で表現している。

行動（「すること」）が——ヘーゲルが言うように——否定性であるならば、「もはや何もすることがない」人間の否定性は消え去るのか、あるいは「用途なき否定性〔*négativité sans emploi*〕

⁴ Bataille, *O. C.*, VI, Gallimard, 1973, p. 416.

⁵ Bataille, « La critique des fondements de la dialectique hégélienne » [1932], *O. C.*, I, Gallimard, 1970, pp. 277-278. [「ヘーゲル弁証法の基底への批判」、『純然たる幸福』酒井健訳、ちくま学芸文庫、2009年、274頁]

⁶ *Ibid.*, p. 286. [同前、288頁]

⁷ *Ibid.*, p. 289. [同前、293頁]

⁸ Bataille, *L'expérience intérieure* [1943], *O. C.*, V, Gallimard, 1973, p. 128. [『内的体験』江澤健一郎訳、河出文庫、2022年、233頁]

⁹ 1937年3月にロジェ・カイヨワ、ミシェル・レリスとともにバタイユが結成した研究会。同年に結成された秘密結社アセファルと対をなす。

う状態で残存するのかという問いが提起されます。個人的には、一つの方向に断定するほかありません。なぜなら、私自身がまさにその「用途なき否定性」だからです（私はこれ以上の確に自分を定義することができないでしょう）。[…] 私の生は——あるいはその破綻、さらにはそれが私の生であるところの開かれた傷口は——、それだけでヘーゲルの閉ざされた体系への反駁になると考えております¹⁰。

もしもコジェーヴが言うように歴史がすでに完了していて、ヘーゲル的な意味での人間は消滅し、「もはや何もすることがない」人間、否定すべき自然も造り変えるべき自然もなく、自然と完全に調和した人間だけが残るのであれば、この私のなかになお残存すると思われる否定性は何なのか。もしもこの残存するものが本当に否定性であるのならば、そこから帰結するのは、歴史が未だ完了していないということか、さもなければ「用途なき」というあり方で「もはや何もすることがない」人間のうちに否定性が残されているかのどちらかである。いずれの場合にあっても、自分の生それ自体がヘーゲルの閉鎖的な体系に穿たれた傷口となって体系を未完了へと導くのだと、バタイユは言うのである。

この問いにおいて注目すべきは、バタイユはヘーゲルを「真面目に」受け取った結果、ヘーゲルの否定性に二重性を見出したということである。一方に「有用な否定性」すなわち労働に向けて組織され何かを生産することに縛りつけられた否定性があり、他方に「用途なき否定性」すなわち何もかも生産せず何の役にも立たず、むしろ有用な否定性が造り出したものを破壊してしまうような否定性があるというわけであるが、このように否定性という概念に手を加えるということは、弁証法の運動それ自体を変質させることにほかならない。バタイユによって導入された「用途なき否定性」は、弁証法的な止揚を逃れて、肯定へと転化することなしに、すべてが肯定へと立ち還る弁証法の最終局面においても、否定的なものとして留まることになる。その時「用途なき否定性」は、「有用な否定性」が構築し閉ざした体系の内側から穴を穿ち、体系を再び外へと開くのである。

有用なもの、生産性のあるものに、それには回収されないものとしての無用なもの、非生産的なものを対置させ、前者の編み上げた閉鎖的な体系や秩序を内破させるというこの仕方はこれ以後——その対立項はその時々で名を変えながらも——、バタイユがヘーゲル的な思考を批判する際の基本的な戦略となる。たとえば、『瞑想の方法』においては自分以外のものを目的とする実利的な思考としての「従属的操作 [opération subordonnée]」と従属的な思考の対象を至高な瞬間に結びつける「至高な操作 [opération souveraine]」が対置されている¹¹ほか、『有罪者』に収められた諸断章には、「行動への投入 [mise en action]」と「問いへの投入 [mise en question]」という操作が、先の二つの否定性のヴァリエーションとして導入されている¹²。これらの操作は、バタイユのあらゆるテキストを貫く重要なタームで言

¹⁰ Bataille, *Le coupable* [1944], *O. C.*, V, *op. cit.*, pp. 369-370. [『有罪者』江澤健一郎訳、河出文庫、2017年、238頁]

¹¹ Bataille, *Méthode de méditation* [1947], *O. C.*, V, *op. cit.*, p. 191-228. [『内的体験』前掲、333-385頁]

¹² Bataille, *Le coupable*, *O. C.*, V, *op. cit.*, pp. 372-381 et 383-387. [『有罪者』前掲、242-256および258-265頁]

い換えれば、「知 [savoir]」を「非-知 [non-savoir]」へと開くための方法である。そして知が非-知へと開かれるためには、知は単なる知ではなく「絶対知 [savoir absolu]」でなければならない。「本物の至高性は、従属的操作に対して、それらが可能な限り完全であったことを要求する」¹³。知は、その極限においてはじめて、非-知に接することができるのである。要するに体系は完全に全うされなければならないのだ。だからこそ、それを全うしたヘーゲルがいなかったならば、バタイユがヘーゲルにまづならなければならないのであったのである（「もしもヘーゲルがいなかったならば、まず私はヘーゲルになる必要があったらう」¹⁴）。

2. 至高性、弁証法、エコノミー

このバタイユの主著の一つとも言える『内的体験』が出版されたのは1943年であるが、これにいち早く反応してきわめて攻撃的な批評を与えたのが、同じく1943年にその主著『存在と無』を出版したジャン＝ポール・サルトルである。ここでその批評のすべてに言及することはできないが、さしあたり我々にとって重要だと思われる論点は、弁証法に関する議論である。

サルトルはバタイユを、人間存在について「人間とは解決できない矛盾である」¹⁵と考える「ヘーゲルの不誠実な弟子」¹⁶たちの列（キルケゴール、ニーチェ、ヤスパース）に加えることで、バタイユの心性を「不幸な意識」の一形態とみなしている。それも、『精神現象学』における意識の発展過程においてその分裂状態が乗り越えられるような「不幸な意識」ではなくて、人間が「解決できない矛盾」である以上、死ぬまで乗り越えられることのない「不幸な意識」である。それは、正、反、合というヘーゲル弁証法の三位一体から、総合 [synthèse] という契機を消し去ることを意味する¹⁷。『内的体験』を読んだサルトルにとって、そこに現れる詩 [poésie]、笑い [rire]、恍惚 [extase] のような知を非-知へと開くための操作は、ヘーゲル的な総合の契機をキャンセルすることで対立を対立のまま残し、「一つひとつの矛盾が我々を別の矛盾へと無限に送り返してゆく」¹⁸という効果をもたらすものと思えなかった。

このようなサルトルの批判に対し、結果的にバタイユを擁護するような形でバタイユの思索にひとつの解釈を与えたのはジャック・デリダであった。『エクリチュールと差異』に収録された論考「限定エコノミーから一般エコノミーへ」において、デリダはバタイユの非-知という問題を、『内的体験』さらにはそれを包摂する著作群『無神学大全』という特定のコンテクストを超えて、バタイユの仕事全体との関連にのうちに書き込むのであるが、デリダの読みの独創的だったところは、一見するとヘーゲルの概念とは無関係なように思われる著作群『呪われた部分』での議論すなわちエコノミー論に結び

¹³ Bataille, *Méthode de méditation*, O. C., V, op. cit., p. 203. [『内的体験』前掲、349頁]

¹⁴ Bataille, *Le coupable*, O. C., V, op. cit., p. 353. [『有罪者』前掲、209頁]

¹⁵ Jean-Paul Sartre, « Un nouveau mystique » [1943], *Situations*, I, Gallimard, 1947, p. 143. [「新しい神秘家」清水徹訳、『シチュアションI』人文書院、1965年、126頁]

¹⁶ *Ibid.* [同前]

¹⁷ *Ibid.*, p. 144. [同前]

¹⁸ *Ibid.* [同前、126-127頁]

つけたことにある。

この『呪われた部分』は、1943年の『内的体験』、1944年の『有罪者』、そして1945年の『ニーチェについて 好運への意志』という、のちに『無神学大全』の総題のもとにまとめられることになる三つの著作の出版を経たバタイユが、エコノミーに関する研究を一つの総題のもとにまとめようとしたプロジェクトである（もともと、厳密にはこの計画は1945年のガリマール宛書簡によれば15年来のものであり¹⁹、前述のヘーゲルとの「接触」に先立っている。早くも1933年には『社会批評』誌に「消費の概念」を發表しているほか、彼の死後に『有用性の限界』として出版されることになる草稿群はすでに1939年から書き始められており、同じく1939年から書き始められた『有罪者』や1941年に書き始められた『内的体験』とも並行する仕事である）。

『内的体験』や『瞑想の方法』における仕事と『呪われた部分』における一般エコノミー [économie générale] に関する仕事は、「思考の諸対象を至高な瞬間に結びつける学問は、実際には一般経済学においてほかにない」²⁰という『瞑想の方法』における一節によって橋渡しされ、デリダはこの一節に基づいて『瞑想の方法』が『呪われた部分』の予告であると指摘している²¹。たしかに、内的体験や非-知の経験を消尽の一種と考える限りにおいて、『内的体験』はエコノミー論と決して無関係ではない。意味の過剰が意味の無益な喪失へと向かう様は、まさしく過剰なエネルギーの無益な消尽であり、それこそが一般経済学の考察対象にほかならない。

しかしヘーゲルとの関連ということになると、『呪われた部分』三部作²²は、ヘーゲルとの関係がほのめかされながらも²³、正面切ってこの哲学者に言及することがほとんどないために、——あったとしてもその言及は本筋に対してほとんど重要性を持たないように見える仕方なされる——『内的体験』や『瞑想の方法』、『有罪者』においてはそれが主題の一つでさえあったヘーゲルとの対決という問題は、もはや副次的なものになってしまったかのように一見すると思われる。「自己意識」や、「主人」とよく似た概念である「至高者」、「従属」と「自律」や「労働」、「死の意識」といった、「主人と奴隷の弁証法」を想起させる用語が多く用いられ、それらがエコノミー論を下から支えてはいるものの、これらの語はヘーゲルやコジェーヴとは微妙に異なる仕方な用いられているために、『呪われた部分』三部作に見出されるのはヘーゲルの足跡ばかりで、そこにヘーゲル自身の姿は見当たらないのである。

¹⁹ Bataille, *Choix de lettres 1917-1962*, Michel Surya (éd), Gallimard, 1997, p. 247. [『バタイユ書簡集』岩野卓司ほか訳、水声社、2022年、267頁]

²⁰ Bataille, *Méthode de méditation, O. C.*, V, *op. cit.*, p. 215. [『内的体験』前掲、369頁]

²¹ Jacques Derrida, « De l'économie restreinte à l'économie générale », *L'écriture et la différence*, Éditions du Seuil, 1967, p. 396. [「限定経済から一般経済へ」、『エクリチュールと差異』合田正人・谷口博史訳、法政大学出版局、2013年、548頁]

²² 著作群としての『呪われた部分』は未完であるが、本稿では便宜上、生前に出版された『呪われた部分 一般経済学試論——消尽』と死後に全集に収録された『エロティシズムの歴史』、『至高性』の三作を合わせて『呪われた部分』三部作と表記する。

²³ たとえば、『エロティシズムの歴史』について、1950年3月28日のメルロ＝ポンティ宛書簡には「実は私はエロティシズムの歴史について書く準備をしているのです。この歴史は一般的な意味での歴史というよりもはるかにヘーゲル的な意味での歴史になることでしょう」(Bataille, *Choix de lettres 1917-1962, op. cit.*, p. 407. [『バタイユ書簡集』前掲、418頁]) という一文が確認される。

そこでデリダがおこなったのは、意味、言説、思考の領域、すなわちヘーゲル的な絶対知の圏域を限定エコノミーの問題系に割り当てることによって、そこからの超出すなわちバタイユ的な非-知の瞬間を一般エコノミーの問題系と重ね合わせるということである。このようにエコノミーの問題がヘーゲルに関係づけられることによって、バタイユが用いるヘーゲル的な概念の微妙な異同の意味するところが明らかになる。デリダの言うように、バタイユはヘーゲルの諸概念にほとんど手を加えない²⁴のだが、しかしバタイユは「それらの諸概念を揺さぶりへと従属させ、新たな布置のなかに移し変え、その布置のなかに再び書き込む」²⁵のである。

この操作のうちで最も効果的かつ重要な役割を担っているのは、「至高性 [souveraineté]」という一語だろう。デリダは、この語が一見すると「主人性 [Herrschaft]」という概念の別の表現のように思われるということを指摘している²⁶。

『至高性』において、至高者と奴隷は以下のように説明される。

至高性と真逆の位置にある奴隷 [esclave]、すなわち何も持たない人間が労働し、そして自分たちの消費 [consommation] を必要最低限のもの、すなわちそれらなしには生きることも労働することもできないような生産物に縮減している一方で、至高者は消尽し、労働しない [le souverain consomme et ne travaille pas] ²⁷。

他方で、『精神現象学』における主人と奴隷の説明は以下のようになされている。

奴隷は物を加工する [bearbeiten] だけである。これに対して主人 [Herrn] には、この媒介 [奴隷による主人と物の媒介] をとおして、物の純粋な否定あるいは享受 [Genuss] としての直接的な関係が生じている²⁸。

『瞑想の方法』において、至高性が用いられたときに、「主人と奴隷の弁証法」には言及されていなかった。だが、こうして両者の具体的な説明を並べてみると、至高性という概念が、「主人と奴隷の弁証法」と関係づけてあらたに説明されていることが分かる。至高者はヘーゲルにおいて主人の反対物であるところの奴隷と対をなし、自身は労働することなしに奴隷が労働によって生み出したものを消費するという点において主人と類似している。

²⁴ Derrida, « De l'économie restreinte à l'économie générale », *L'écriture et la différence*, op. cit., p. 373. [「限定経済から一般経済へ」、『エクリチュールと差異』前掲、510 頁]

²⁵ *Ibid.* [同前]

²⁶ *Ibid.* [同前、512 頁]

²⁷ Bataille, *La souveraineté*, O. C., VIII, Gallimard, 1976, p. 248. [『至高性』湯浅博雄・中地義和・酒井健訳、人文書院、1990年、9-10 頁]

²⁸ G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes* [1807], *Werke*, 3, Suhrkamp, 1970, p. 151. [『精神現象学 上』熊野純彦訳、ちくま学芸文庫、2018年、310 頁]

しかし、この見かけ上の類似にもかかわらず、デリダは両者の差異に注目する。主人と奴隷の弁証法がたどる道行は、「バタイユの思考のうちで省察される時、本質的な変位を蒙る」²⁹と云うのである。デリダは、「いかなる規定的な定在〔Dasein〕にも結びつけられていないこと、定在一般の普遍的な個別性にも、生命〔Leben〕にも結びつけられていないことを示す」³⁰という主人の呈示〔Darstellung〕を「至高の操作」になぞらえて「主人性の操作〔opération de la maîtrise〕」と呼び、自分の生命を「賭けに投じる〔mettre en jeu〕」ことに帰着するとしたうえで、この賭けが、弁証法の過程のうちで投資〔investissement〕へと横滑りし、限定エコノミーに回収されることを指摘する。ヘーゲルは、闘争において主人が主人として承認されるためには主人と奴隷双方の生命が保存されなければならないということを指摘していた。というのも、主人のほうで死んでしまえば自立的存在〔fürsichsein〕であるという自己自身の確信が失われ、奴隷のほうで死んでしまえばこの確信に与えられるはずだった客観性が失われてしまうからだ。いずれの場合においても、その意味するところは、賭けの払戻金を受け取れないということである。このように生死を賭けた闘争が、結局のところ生命のエコノミーへと回収されるという次第を、デリダは「生命の狡知〔ruse de la vie〕」³¹と呼んだ。賭けにおいて明らかにされるのは、「自己意識にとっては生命もまた、純粋な自己意識が本質的であるのと同じくらい、本質的である」³²ということなのである。

ここにおいて、主人が賭けに投じた「自然的な生命〔vie naturelle〕」の概念に代わって、「本質的な生命〔vie essentielle〕」の概念が密輸入されている。「本質的な生命は自然的な生命につながり合わせ、自然的な生命を引き留め、自己意識、真理、意味の構築のために働かせる。これが生命の真理である。このように止揚〔Aufhebung〕——それは賭金を保持し、賭けの主人であり続け、賭けを制限し、賭けに形式と意味を与えることによって賭けに働きかける（Die Arbeit...bildet）——に訴えることによって、この生命のエコノミーは、意味と同じような自己の保存、循環、再生産に限定される」³³。

この限定された生命のエコノミーを一般エコノミーへと超出させるのは、至高の操作としての笑いの炸裂である。「ただ笑いだけが弁証法〔dialectique〕と弁証法を操作する者〔dialecticien〕を超えてゆく」³⁴。弁証法において、止揚は「意味があるべきだ」という命法に従属し、どこかコミカルな真面目さをもって息を切らしながら忙しくなく死に意味を与えようとする³⁵。それこそが笑うべきものであり、この真面目な止揚があくせく働いて生産した意味が絶対的な供犠に、すなわち「回帰も留保も欠いた

²⁹ Derrida, « De l'économie restreinte à l'économie générale », *L'écriture et la différence*, op. cit., p. 374. [「限定経済から一般経済へ」、『エクリチュールと差異』前掲、513頁]

³⁰ Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, op. cit., p. 148. [『精神現象学 上』前掲、304頁]

³¹ Derrida, « De l'économie restreinte à l'économie générale », *L'écriture et la différence*, op. cit., p. 376. [「限定経済から一般経済へ」、『エクリチュールと差異』前掲、515頁]

³² Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, op. cit., p. 150. [『精神現象学 上』前掲、308頁]

³³ Derrida, « De l'économie restreinte à l'économie générale », *L'écriture et la différence*, op. cit., p. 376. [「限定経済から一般経済へ」、『エクリチュールと差異』前掲、515-516頁]

³⁴ *Ibid.* [同前、516頁]

³⁵ *Ibid.*, pp. 377-378. [同前、518頁]

供犠」³⁶に供されるとき、この光景はひとつの喜劇となり、笑いは炸裂するだろう。ヘーゲルはこの意味の供犠に目をつむったために喜劇に気づかず、ゆえにヘーゲルの体系には笑いが欠けている。デリダはこの死や絶対的供犠を総称して「留保なき否定性」³⁷と呼ぶが、ヘーゲルはこの死、留保の欠如を「抽象的否定性」と呼んで意味を与えることによって、留保なき否定性から目をそらしてしまった。だが、まさにこの「抽象的否定性」が現れる地点において、ヘーゲルは留保なき否定性が肯定と否定の共犯関係の彼方であって、もはや肯定には転化されないということを、「理解することなく理解し、隠しながら示した」³⁸のである。

バタイユが行ったのは、留保なしにヘーゲルの後を追いつつ、この「抽象的否定性」という覆いを引き裂いて傷口を開くために、「ヘーゲル自身の解釈を——ヘーゲルに抗って——解釈しなおすこと」³⁹である。それは、「ヘーゲルの言説の偽装された [simulée] 反復」⁴⁰である。バタイユがヘーゲルの絶対知を模倣する [mimer] なかで、ヘーゲルの主人性という概念によく似た至高性という概念が、仮面をかぶせられて舞台に躍り出て、主人性の代役をする [doubler]。この偽装、模倣、代役によって、至高性は弁証法に何らかの変位を生じさせる。しかしその変位は、サルトルが言うような弁証法的総合の抹消とは異なる。「至高性は弁証法的総合を消し去るどころか、意味の供犠のうちに弁証法的総合を書き込み、この総合を機能させる」⁴¹。総合の抹消によって弁証法の運動を中断させるのではなく、総合を新たな布置へと書き込むことで運動それ自体をずらし、まさにこのずれによって、運動は円環を閉じることができずに、絶対知の彼方、非-知の夜へと投げ出されるのである。

3. 意味から非-意味へ、非-意味から意味へ

このようなデリダの読解は、バタイユの笑いをヘーゲル的な否定性から峻別し、不幸な意識がそのような分裂状態の彼方に笑いを位置づける点において、サルトルの批判からバタイユを救うものである。だが一方で、「バタイユをバタイユに抗って解釈しなければならない」⁴²という言葉が示すように、このようなデリダの解釈がバタイユの意図を超えたところでなされているということには留意しておかねばならない。実際、「限定エコノミーから一般エコノミーへ」におけるデリダのバタイユ解釈が自身の脱構築の理論を説明するものであったということはいくつかの研究ですでに指摘されている⁴³。このような事情を考慮するならば、たとえこのデリダの読解が一定の正しさを有するとしても、我々はデリダがバタイユに抗う地点にとどまって、バタイユ自身の記述や意図に寄り添いながらバタ

³⁶ *Ibid.*, p. 377. [同前]

³⁷ *Ibid.*, p. 380. [同前、522 頁]

³⁸ *Ibid.*, p. 381. [同前、524 頁]

³⁹ *Ibid.*, p. 382. [同前、525 頁]

⁴⁰ *Ibid.* [同前]

⁴¹ *Ibid.*, pp. 382-383. [同前、526 頁]

⁴² *Ibid.*, p. 404. [同前、559 頁]

⁴³ Bruce Baugh, *French Hegel: From Surrealism to Postmodernism*, *op. cit.*, p. 91; 岩野卓司「「真面目な」バタイユ——バタイユからデリダへの「継承」について——」、『言語と文化』第10巻別冊、法政大学言語・文化センター、2013年、227-241頁。

イユのヘーゲル読解を解釈しなおすこともまた可能である。

実際、50年代以降のバタイユのテキストには、「ヘーゲルの言説の偽装された反復」という戦略を超えて、人類学や考古学による最新の成果に基づきながら、ヘーゲルの学説に積極的に介入しようとする意図を見出すことができる。たとえば、バタイユは『エロティシズム』において「侵犯」という操作を説明する際、デリダの解釈に従うならば不適切であるはずの止揚という弁証法的契機を侵犯に対応させている⁴⁴。デリダによればこのような事態もまたヘーゲル的な概念の戦略的な変位とみなされるが⁴⁵、バタイユが同書で強調しているのはむしろ、「禁止は犯されるために存在している [l'interdit est là pour être violé]」⁴⁶という命題と「侵犯は、俗なる世界を破壊することなしに、これを超えてゆく [la transgression excède sans le détruire un monde profane]」⁴⁷という命題——それらはロジェ・カイヨワが記述した人類学の成果に基づいて引き出されている——に含意された禁止と侵犯の共犯関係であり、意味の世界と非意味の世界の関係は、絶対知から非知への一方向的な超出というモデルから、俗なる世界と聖なる世界の相互補完というモデルへと変化している。

このような人類学や考古学の成果に基づくヘーゲルの学説への積極的な介入は、『エロティシズム』に限らず50年代半ばのバタイユのテキストに数多く見出すことができる。たとえば「ヘーゲル、死と供犠」においては、「死を前にして恐怖で後ずさりする」人々の側にヘーゲルを置いたうえで、「死の業を前にしての陽気な反応」の例をウェールズ地方やメキシコの習慣から紹介し、「陽気な不安、不安な陽気」のなかで生じた喜悦が引き起こす絶対的引き裂きを示すことで、『精神現象学』序論における死を前にした精神の絶対的引き裂きとは異なった、死の意識のエロティックな様相を描き出している⁴⁸。また、「ヘーゲル、人間と歴史」においては、『ラスコーあるいは芸術の誕生』に代表される先史時代についての研究をとおして得た知見に基づき、労働の開始を奴隷の誕生の前に位置づけ、代わりに「聖なる時間」と「俗なる時間」という二つの時間を導入することで、ヘーゲル的な主奴の空間的な分裂に先立って時間的な分裂が同一の個人の内面に生起していたはずだということを指摘している⁴⁹。

これらの介入はいずれも「ヘーゲルが見なかったもの」に目を向けることによってなされているが、この時期のバタイユにとって「ヘーゲルが見なかったもの」とは、『内的体験』でそう言われていたような詩、笑い、恍惚といった至高の操作や、「留保なき否定性」としての死や絶対的供犠といった事柄だけにとどまらない。自身の死の一年前にコジューヴにあてて書かれた書簡には以下のような言葉が残されている。

⁴⁴ Bataille, *L'érotisme* [1957], O. C., X, Gallimard, 1987, p. 39. [『エロティシズム』酒井健訳、ちくま学芸文庫、2004年、471頁]

⁴⁵ Derrida, « De l'économie restreinte à l'économie générale », *L'écriture et la différence*, op. cit., pp. 405-406. [「限定経済から一般経済へ」、『エクリチュールと差異』前掲、560-562頁]

⁴⁶ Bataille, *L'érotisme*, O. C., X, op. cit., p. 67. [『エロティシズム』前掲、103頁]

⁴⁷ *Ibid.*, p. 70. [同前、108頁]

⁴⁸ Bataille, « Hegel, la mort et le sacrifice » [1955], O. C., XII, op. cit., pp. 340-342. [「ヘーゲル、死と供犠」、『純然たる幸福』前掲、223-226頁]

⁴⁹ Bataille, « Hegel, l'homme et l'histoire » [1956], O. C., XII, op. cit., pp. 356-357. [「ヘーゲル、人間と歴史」、『純然たる幸福』前掲、245-247頁]

それでも私は、あなたの『ヘーゲル読解入門』に並行するようなことを試みたいのです。しかしそれははるかに恣意的なものになることでしょう。そして主としてヘーゲルが知らなかったもの、無視したもの（たとえば先史時代 [préhistoire]、現在時 [le temps présent]、未来 [avenir]）を解釈するための努力に基づいたものになることでしょう⁵⁰。

ヘーゲル的な歴史に先立つ先史時代と、絶えず時間の荒廃作用 [dévastation]⁵¹によって乗り越えられてゆく現在時、そして歴史の終焉とともに消え去る未来という、ヘーゲルが無視した（あるいは無知であった）三つの時間に向けて目を開くことで、バタイユはもうひとつの『ヘーゲル読解入門』を試みている。ここにおいて我々は、体系を内破させることによって意味を非-意味へと開こうとするバタイユとは異なる、体系への欲望を隠せないバタイユのもう一つの様相を見る。実際、バタイユは『無神学大全』や『呪われた部分』のように自分の著作を一つの総題のもとに組織化することを常に企てていたし、「世界史 [Histoire universelle]」を書く構想を練っていたということも書簡から確認することができる⁵²。この「世界史」について、それをバタイユの生涯について語るときの不可欠な要素とみなしたミシェル・シュリヤ⁵³は、1950年代から死に至るまでに書かれたテキストが「世界史」のための準備作業だったのではないかと指摘している⁵⁴が、まさにこれら50年代のテキストの通奏低音にヘーゲルがいることを鑑みれば、バタイユの構想する体系の参照項として常にヘーゲルがいたということは疑いを容れないだろう。たとえば、『無神学大全』第五巻として構想された未完の著作『非-知の未完了の体系』第一部に組み込まれる予定だった『宗教の理論』⁵⁵では、同書で展開された考えがコジェーヴの『ヘーゲル読解入門』のうちに存在していることを述べたうえで、「ヘーゲルの分析とこの『宗教の理論』との対応関係をもっと正確にすることが残されているだろう」⁵⁶と述べている。

このような体系への終わりなき仕事のなかでバタイユがヘーゲルと新たに結び結んだ関係は、もはや単純な対決でも戦略的な模倣でもありえない。ヘーゲルの学説に依拠しつつ、「ヘーゲルが見なかったもの」に目を向けることで、ヘーゲルがそれを見ないまま体系に書き込んでいたということが明らかになり、それによってヘーゲルの正しさが遡及的に明かされる。ここにあるのはひとつの相互補

⁵⁰ Bataille, *Choix de lettres 1917-1962*, op. cit., p. 573. [『バタイユ書簡集』前掲、578頁]

⁵¹ Bataille, « Hegel, l'homme et l'histoire », *O. C.*, XII, op. cit., p. 363. [「ヘーゲル、人間と歴史」、『純然たる幸福』前掲、258頁]

⁵² Bataille, *Choix de lettres 1917-1962*, op. cit., pp. 80-84. [『バタイユ書簡集』前掲、110-114頁]

⁵³ Michel Surya, *Georges Bataille, la mort à l'œuvre* [1987], Gallimard, 1992, p. 562. [『G・バタイユ伝』、下巻、西谷修・中沢信一・川竹英克訳、河出書房新社、1991年、244頁]

⁵⁴ *Ibid.*, p. 508. [同前、205頁]

⁵⁵ 厳密には『宗教の理論』の執筆時期は1948年とされているが、出版の計画は流産し、再び1954年に『無神学大全』のなかに位置づける構想がなされたという経緯があるため、ここでは50年代の諸計画の一部とみなしている。

⁵⁶ Bataille, *Théorie de la religion* [1974], *O. C.*, VII, op. cit., p. pp. 358-359. [『宗教の理論』湯浅博雄訳、ちくま学芸文庫、2002年、156頁]

完的な共犯関係である。ヘーゲルなしにバタイユの思考はありえないし、バタイユなしにヘーゲルの正しさは明かされない。その意味で、50年代のテキストは、デリダが言うようなヘーゲルの体系の非-意味への超出という40年代の仕事の単なる延長としてだけ読まれるのではなく、「ヘーゲルの歩みの並外れた確かさ」⁵⁷を救うためのより実証的な仕事として、読まれるべきものであろう。

⁵⁷ Bataille, « Hegel, la mort et le sacrifice », *O. C.*, XII, *op. cit.*, p. 344. [「ヘーゲル、死と供儀」、『純然たる幸福』前掲、231頁]